

法政大学大学院 政索創造
研究科 ニューズレター

「新・テルマエ通信」第1
号

2012年8月5日発行

皆様こんにちは、増淵ゼ
ミM2の平川拓也と申しま
す。この度、政策創造研究
科内における、ゼミ間の横
の繋がりを強くすることを
目的として、政策創造研究
科ニューズレター「新・テ
ルマエ通信」の発行をする
ことになりました。

当ニューズレターは、ゼ
ミ代表者会議が主体となり
行っている2012年度法
政大学大学院 研究補助金
の使途先となる、政索創造
研究科各プロジェクトやゼ
ミ間懇親会、ゼミ代表者会
議の会議内容。それから各
ゼミの紹介等等、皆様には有
益な情報を発信していきたく
と思います。発行は4半
期に1度を予定しておりま
す。

今回第1号は、各ゼミの
紹介と、大学院研究補助金
の使途先である各プロジェ
クト概要・公募要件\期間の
ご案内となっております。
以下、各ゼミ編集委員の
方々のゼミ紹介文となつて
おります。

【坂本ゼミ】

2012年6月3日(日)、
市ヶ谷田町校舎5階マルチ
メディアホールにて、映画
「1/4の奇跡」の上映と原
作者の「かつこちゃん」こ
と山元加津子さんの講演会
が開催されました。

「1/4の奇跡」について、
ご存知無い方に、少しだけ
解説します。

NET特集でも取り上げら
れていたのですが、マラリ
アという恐ろしい病気によ
って絶滅しかかった村に、
マラリアに耐性を持った、
つまりこの熱病にかからな
い人たちが発見されたこと
から物語は始まります。

マラリアに耐性をもつ人
たちの中には一定程度、重
度の障害を持つ人が生まれ
ます。彼らの遺伝子の中で、
マラリア耐性は子々孫々受
け継がれていきます。何十
年、何百年かに一度あるマ
ラリアの大流行。村人は、
障害を持つ人たちを大切に
することで、村を絶滅の危
機から守ってきたのです。
その割合が1/4。いろいろな
命なんて一つも無かつ
た・・・それが「1/4の奇
跡」というお話です。

映画のあとで、原作者で
あるかつこちゃんの講演が
あったのですが、実は私、
講演前に、かつこちゃんを
見ました。 講師控え室に
いればいいのに、廊下をウ
ロウロしてました・・・迷
子かなあ？・・・それがか
つこちゃんとの出会いです
(笑)

かつこちゃんの話も驚愕
すべき内容でした。脳幹出
血で植物状態となり、余命
3年を宣告された友人を目
覚めさせるお話です。(実
はこの物語は現在進行形で
ジエクト」で検索してみ
てください)

かつこちゃんと言います。
「大丈夫です。私は多くの
子供たちから学びました。
人間には無限の可能性があ
ります」

たくさんの、まだ気がつ
いていない人たちを目覚め
させる為に、頑張れかつこ
ちゃん！



坂本先生はベストセラー「日本でいちばん大切にしたい会社」の作者でもあります。

専門は経営学。地域経済論や地域企業論のフィールドワークの中で「障害者雇用問題」を取り上げるうちにかっこちゃんと出会い、今回の講演会に至りました。

坂本ゼミの特徴は「弱者への視点」と「現場主義」。国民の幸福度を表すGNH（国民総幸福度）を日本の都道府県に当てはめたらどうなるか：「都道府県別幸せ度ランキング」の研究でも有名です。

（文責・鈴木幸司）

【恩田ゼミ】

恩田研究室は、修士1年生3名、修士2年生3名、研究生1名の計7名です。ゼミ生のテーマは、「まちの記憶（イメージ）」や「公園利用」など多岐にわたります。都市史を専門とさせる恩田先生のもと、様々なテーマを持ったゼミ生と時間を忘れ、日々発熱した議論を行っています。

現在、ゼミプロジェクトとして、静岡県浜松市と長

野県諏訪市のまちの賑わい調査を行う予定です。浜松市では、戦後に建てられた「共同建築」の実態とその活用をテーマに、諏訪市では、中心市街地の実態調査を行っています。まちに残る建物、それは歴史的価値（評価）に関わらず、そのまちの資源になると考えられます。風土や歴史、地元の人々と共に歩んできた「建築」を活用した、まちの賑わいを検証していきます。

（文責・富永正義）

■研究室紹介と岡本義行研究室

岡本義行先生の主な研究テーマは企業論、産業論、地域経済論などであり、日本及びイタリヤを中心としたヨーロッパの中小企業戦略や地域コミュニティの活性化に関する研究も行っていきます。また、大学連携や地方自治体連携などのコーディネーターとしても活躍されています。

ゼミ内容

岡本ゼミでは毎週行われるゼミナールではゼミ生全員で行う合同ゼミ(修士課

程9名、博士後期課程16名)と修士のみで行う輪読があります。合同ゼミでは外部から講師をお招きし、講義や方法論についてのディスカッション、小布施町や七尾市、ヨーロッパなどといった国内外の視察を行っています。修士の輪読では社会科学系の本を読み、地域経済の概念などを理解、整理し新しい理論的フレームワークについて議論していきます。岡本ゼミの最大の特徴がこの輪読です。この輪読は他のゼミの輪読とは違い、文献の内容について理解していくだけではなく、その背景にある要因などについて様々な視点から幅広く考えディスカッションを行っています。ふと、先生がおっしゃる“それはなぜ？”という問いかけにゼミ生は額に汗しながら考え、また国内だけでなく海外の事例なども数多く紹介してくださるのでより密度の濃い輪読になっています。

参考までにこれまで輪読してきた文献としては

・『安心社会から信頼社会へ』山岸俊男（中央公論新社 1999）

・『ソーシャルキャピタル』

ウェイン・ベーカー（ミネルヴァ書房 2001）
『イノベーターの条件』P.F.ドラッカー 著（ダイヤモンド社 2000）
・『日本の「安心」はなぜ消えたのか』山岸俊男（集英社 2008）

・『現代の二都物語』アナリー・サクセニアン（日経BP社 2009）

・『クリエイティブ都市論』リチャード・フロリダ（ダイヤモンド社 2009）

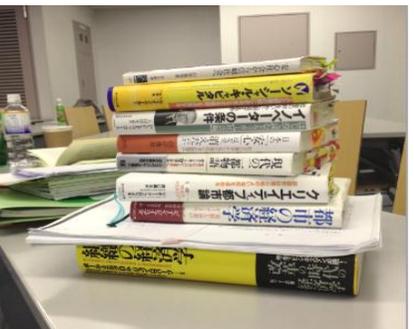
・『都市の経済学』ジェーン・ジェイコブス（TBSブリタニカ 1986）

・『転職』M・グラノヴェッター（ミネルヴァ書房 1998）

・『組織の経済学』ポール・ミルグロム、ジョン・ロバーツ（NTT出版 1997）

・『クリエイティブ・クラスの世紀』リチャード・フロリダ（ダイヤモンド社 2007）

などがあります。



どの本もとても興味深いものばかりなのでぜひ皆さんも一度読んでみてはいかがでしょうか。深く、熱い議論を求めている皆様、是非岡本ゼミに顔を出してみてください

（文責：政策創造研究科 修士一年 外池秀輔）

【北原研究室】

北原研究室では、企業の社会的責任（CSR）について研究しています。現在は6人のゼミ生（全員修士課程）が所属しています。2012年度の新入生は2人です。そのうちの1人は学部出身で、新入社員の気持ちになったように頑張っています。ちなみに男女比は4・2、平均年齢は42〜43歳です（他の研究室よりちょっと高めでしょうか）。

2012年度のゼミは、ゼミ生が順番に（2人ずつ）自分の研究テーマに沿った形で、修士論文の経過報告、CSRの最新情報、文献などを発表し、北原正敏教授の指導のもと討議しながら進めています。また、北原研

究室のOBOGがCSRに関連する講義等を行うこともあります。他の研究室に比べると少人数ということもあり、じっくり議論することもでき、ゼミ生同士（OBOG含め）とても仲が良く和気あいあいとしています。

また、毎年夏には恒例の合宿があり、企業訪問なども実施しています。実際に現場に行くことによって得るものも多く、非常に良い勉強になります。その他にも随時企業訪問を行うなど、CSRに関連する調査・研究に積極的に取り組んでいます。



（文責：重山紀子）

【中嶋研究室】

「テルマエ通信」読者の皆様、こんにちは。中嶋ゼミの編集委員を務めることとなりました、小林拓実と申します。今回は、我らが中嶋ゼミの紹介をさせて頂きたいと思います。

中嶋ゼミは今年度に設立された新しいゼミです。中嶋聞多先生は2009年に信州大学から本研究科に着任されました。現在は地域活性化、地域と企業のブランド&イノベーション戦略を専門とされています。ゼミ生は計5人で、学芸員や小学校の先生、そして私のような学部上がりまで、様々な面々が揃っています。

我々ゼミ生はゼミに加入する際、中嶋先生から1つの条件を課せられています。それは「フィールドワークの場を持つ」ということです。そのため、各々が生まれ育った地域や関心のある地域を選択して調査、研究を行っています。現在、特に積極的な活動を行っているのは、埼玉県東秩父村をフィールドとしている松岡さんです。ゼミ長でもある松岡さんは今年5月、埼玉県の中山間地域に活力をも

たらず「ふるさと支援隊」の事業に応募し、見事、活動資金として50万円の補助金を獲得された優秀な方です。

去る6月24日は我々ゼミ生や中嶋先生、さらに他のゼミの方々にも参加して頂いて、東秩父村でのワークショップを開催しました。村の方々がどれほど参加して下さるのか不安でしたが、予想以上に多くの方が参加してくださいました。我々が学ばせて頂いたのは言うまでもありませんが、村の方々も、慣れ親しんだ村の魅力を再確認されていたように見受けられ、とても有意義な会となりました。

なお今回のワークショップには埼玉新聞が取材に訪れてくださり、紙面、ホームページで大きく取り上げて頂きました。記事のコピーは研究科の9階に張られていますので、ご覧頂ければと思います。

最後にもう1つだけ告知をさせて下さい。中嶋ゼミのFacebookページを作成しました。ゼミが手掛けるプロジェクトや、地域づくりに、地域ブランディングに関する情報をお伝えしていきます。URLは、

<https://www.facebook.com>

[chikizukuri/](https://www.facebook.com/chikizukuri/)です。皆様に「いいね！」を押して頂ければ幸いです。(文責<小林拓実)



【小峰研究室】

私たち小峰・池永ゼミでは、実際の政策立案現場におけるご経験が豊富な先生方のご指導のもと、院生各々が非常に多岐に亘る興味・関心に沿って、調査・研究を進めています。ゼミメンバーそれぞれの研究テーマは、日本の政治経済、雇用・労働・福祉政策、地域経済問題、各国経済事情、ビジネスイシュー、交通経済・政策、などといったように多様で、自らの関心に合わせて自由に勉強できる環境があります。人数は17名(2012年現在・先生

方除く)と比較的多く、ドクターコースの方々も複数おり、新入生にとっではないささか敷居が高いながらも、チャレンジングで刺激的なゼミであるように思います。

さて、私たちのゼミや先方を含め、本研究科では、研究成果の発信の場として、各種シンポジウムや研究会を開催しています。今年度の当ゼミメンバーが携わったものとして、5月に岐阜

県恵那市を舞台とした映画『ふるさとがえり』の上演会を開催し、多くのご好評を頂きました。田舎で育った少年が、東京で社会人になるがあるきっかけで帰郷し、そこで昔を思い出しながら次第にいろいろ葛藤していくという内容で、思わずほろりと来た人も多かったようです。6月には、本研究科主催にて「今ここに
ある財政危機」と題したシンポジウムが催されました。当ゼミの小峰教授による基調講演と、本研究科岡本教授や外部の著名な専門家によるパネルディスカッションが行われました。「日本の財政は、このままではどうなるのか」、「市場の信認は維持されるのか」、「民意は当てになるか」、「政府と民

間はそれぞれ何をすべきか」といったようなテーマでの議論が白熱し、定員を上回る参加があったそうです。筆者としても大いに勉強になりました。今後日本社会で生きていくであろう、そして将来世代を育てていく若年層としては、財政や経済状況を好転させていかねばと強く感じるところです。

同月にもう一つ、研究会も行われ、池永教授より内閣府経済社会研究所の桑原進氏をお招きし、『幸福度』に関する基本的な考え方や現時点での分析結果についてご講演頂きました。ここ最近の研究によれば、「所得による幸福度改善には限界がある」「失業は幸福度を大きく引き下げる」「幸福と幸福感は異なる」というような傾向が見られるそうです。国策に活かすために更なる研究を進めているとのことでした。

最後に、筆者なりの問題提起をして、本稿を締めたいと思います。「幸福度」と言ったときに、それは結局のところ「誰にとっての」幸福なのか。今の制度で、誰が「幸せになって」、誰が「不幸になる」のか。成熟

社会の仲間入りをした日本において、「どういう社会」なら、あらゆる人が幸せなのでしょうか。(文責：別所弘基)

〔「幸福度」研究会の様子〕



【増淵ゼミ】

〔一〕ゼミ風景
〈研究発表〉

増淵ゼミでは現在、学生の研究内容の発表を行っています。発表は五分質疑応答五分という時間配分で行っています。M2、M1の順で発表していく予定なのですが、研究生の人数が多いため、まだM2の方全員の発表が終わっていない状態です。そして研究の進み具合も大分個人差があるのですが、大体の方々が質疑応答の際に先生をはじめ、学生の方

に詰めが甘いところ等、疑義を正されボロボロにされています(笑)。しかしながら議論も活発に行われており学生たちにとって貴重な時間となっています。



出ないよう8月と9月の2回に分けて合宿を行う予定です。現在8月の候補地として決定しているのが台湾です。9月はまだ確定はしていませんが、増淵教授の故郷の北海道や若しくは新潟県越後妻有、長野県小布施町等の候補が挙げられているのですが、おそらくこの中から選定すると思われます。

(文責：清水こうた)

【2】オトナの Culture 研究会
〈オトナの Culture 研究会とは〉



増淵教授は 2012 年度から「オトナの Culture」の研究を目的として、現役ゼミ生およびゼミOBを筆頭に、「オトナの Culture 研究会」を立ち上げました。ここでいう「オトナの Culture」とは、増淵教授によれば、「少子高齢化や人口減少の影響で、主力マーケットが「オトナ」に移行し、同好の士、趣味の共有など、新たな「オトナ」マーケットでのトライブ構想が始まる中、そこで生まれる新たなサードプレイスや新たなビジネス創出の可能性」であり、「オトナの Culture 研



究会」通称「オトカル」では、こうした「オトナの Culture」に関するテーマを設定し、各テーマに合わせた施設をグループごとに現地調査を試みる場所から始まりです。また、今後は調査した内容をゼミ内で共有し、「オトナの Culture」について広く見識を深めることも念頭に入れており、いずれは各調査班の報告会が予定されています。

〈ゼミ合宿〉

夏のゼミ合宿の日程と候補地をゼミ生で話し合い予定を調整しています。予定が合わず参加できない人が

〈活動内容〉

「オトナの Culture 研究会」の現在の活動予定は以下の通りです。

1) 風俗グループ

6月30日 四谷荒木町界限
スナック

2) 音楽グループ

6月26日 六本木ディスコ
「マハラジャ」

3) 行楽グループ

6月30日 浅草演芸場「落語」

4) 習い事グループ

7月21日 東京都写真美術館

* 「オトナの Culture 研究会」ではグループを横断してどの活動にも参加できるため、中には重複して参加する人たちもいます。
(文責) 東山達也)

【諏訪ゼミ】

当ゼミを率いる諏訪先生は、労働法・雇用政策分野において日本を代表する研究者であり、経産省・厚労省にも多くの提言をされています。日本で唯一といえる雇用政策専門の当プログラムには、企業セクター、大学セクター、公務セクター等、各方面で活躍する志

有る専門人材(修士課程8名、博士課程8名、研究生4名)が集い、日々研鑽しております。

ゼミはまず「頭の体操」から始まります。「頭の体操」とは、諏訪先生が様々な媒体から抜粋した一見して関連が薄そうですが実はそうではない記事や統計をもとに各人が情報を読み取りながら、知的な発見をし、統一的な説明を組み立てていく作業で、別名『知的ストーリーの組立て』とも言われています。最初は誰もが不思議に思い戸惑いますが、繰り返しにつれて徐々に組立て時間が短縮し、深いストーリーが出来上がるようになり、日増しに訓練の成果が見えてきます。

このように諏訪先生の指導は、まず大学院生として基礎的な知識や論理的な思考力を身につけさせ、基礎力を高めながら雇用の専門的な知識を積み重ねていきます。さらに、相互学習会

である「師範代講座」を開き、博士課程・上級生による定期的な自主勉強会を行っています。これは「自らの力を高めたければ上位の者に挑戦し、自らの力を確実に身につけたければ下位の者を指導せよ」という、道場主の教えに沿ったものです。

博士課程の師範代からは高度な研究手法や驚くような技を、修士生からは修論作成体験談を、上級生からはインタビュー手法や統計解析ツールの使い方をと、先輩から後輩への知の伝承、継承がなされ、まさに温故知新、古き良き時代のような知的道場です。道場の中では上下関係もなく懇親の場も充実しています。いつも各自が持ち寄った手土産のお菓子とお茶を頂きながら、リラックスした雰囲気で行われ、時には授業の後「諏訪 Bar」という懇親会が誕生し、杯を酌み交わしながら白熱した議論を展開します。(Barにはワイン、

ビール、焼酎、日本酒の他に間接照明やBGMまでも先生が常備されています)

春・夏休みの合宿では、学習会や飲み会のほかに、当ゼミ名物の「歩き輪読」という儀式があります。ここでは、清々しい外気と太陽のもと、1列になって歩

きながら最後尾の人が雇用に関する本の一段落を大きな声で読み上げ、読み上げると先頭に行き、次に最後尾になった人が同様に順番に読み上げていく、まさに身体機能と頭脳を同時に鍛えられる素晴らしい体験をすることが出来ます。(状況によっては度胸も付きます)

当ゼミでは、今年度も「雇用に関するインターネット調査」をはじめ、様々な活動を予定しており、まさに千葉周作道場の門を叩いて心身を鍛え志をたてた、坂本龍馬の名言の如く「日本の洗濯」ができるような一騎当千の志士となるべく日々精進してまいります。

(文責、姜英順)

ニューズレター編集委員

- ・清水こうた・東山達也
- ・姜英順・別所弘基
- ・小林拓実・重山紀子
- ・富永正義
- ・鈴木幸司・平川拓也
- ・増成勇希

